

戦前の論説 冊子に



寄贈された8冊の学友会誌とともに、冊子を手で感謝する諏訪清陵高校の倉澤克弥校長

戦前の少年たちの思考を読み解き、理解する極めて貴重な史料だ——。旧制諏訪中学校(現諏訪清陵高校)雑誌部が昭和初期に発行した学友会誌掲載の論説が冊子にまとめられ、8冊の学友会誌とともに同校に寄贈された。会誌からは「自治」「質実剛健」の校風が当時から大事にされていた背景がうかがい知れ、開戦直前の国の在り方や教育論を説く内容もある。同校の倉澤克弥校長は「大変貴重で素晴らしい題材をいただいた」と感謝し、「生徒にもぜひ読んでもらい、時代を探究してほしい」と話している。(杉本哲也)

OBが「実物」添え母校へ寄贈

小冊子をまとめたのは、都内に住む同校卒業生の男性。昨年、古書店のリストで諏訪中学友会誌が出品されているのを見つけ、1929(昭和4)〜40(同15)年の間に発行された8冊を入手した。このうち29年3月発行の学友会誌第28号は、同校図書館にも所蔵されていなかった新発見の1冊。男性はその後、AI生成の活用や高校同期の大学教授らの助言を得て要約し、A4判66頁に製本した。

当時の中学生はおよそ12〜16歳。男性は「時代背景もあるだろうが、その年代から自反の精神が備わっていた」と語る。昭和1桁年代の論説では自治、校風の在り方を問い、伝統の衰退を嘆く内容が目立つ。以降は日本が領土拡大の準備段階にあったことを反映し、国を背負う使命を論じる内容が増えていく。

38(昭和13)年の第37号を見ると、「昭和青年は帝国の理想実現を『東洋侵略に備え軍備を増強せよ』…などの勇ましい言葉が並ぶ。一方で『中学生生活の目的は自己の発見』といった呼び掛けもあり、男性は「軍国主義一色に染まっていないところが諏訪中生らしい」と酌む。

冊子と学友会誌は17日に寄贈。男性の同級生で冊子編集にも携わり、寄贈の橋渡し役を担った元同校校長の古原正之さん(77)＝岡谷市＝は「一つ一つの文章が立派で、大学生並みの分析をしている。当時の生徒たちは社会問題や生き方を真剣に考えていた。ぜ

無料公開。ダウンロードして誰でも読むことができる。同校同窓会の今井竜五会長は「大変内容の濃い



冊子の内容はウェブ上QRコードに7月18日まで

一冊。多くの同を過ごした先輩
クワラ馬肉料理・チ
居酒屋
知ってもらえた
いる。